
とある科学の拒絶反応（アウトラウンダー）

宮内孝則

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の拒絶反応（アウトラウンダー）

【Nコード】

N6690W

【作者名】

宮内孝則

【あらすじ】

アウトラウンダー
拒絶反応。

それは彼の発現した能力の名であり、彼自身を現していた。

孤独と罪の中に生き、それでも必死に運命に抗おうとした少年は230万人のうち八割が学生という街。学園都市で何を見て、何を感じ、何を思うのか。

抱えたたった一つの思いを胸に彼は物語をどう変えていくのか。分からないのなら前に進み続けるしかない。

お知らせ

どうも宮内です！。

今回、突然ですが『とある科学の拒絶反応』をいったんリセットし、また一から始めさせていただくことにしました。

理由ですが、やはり私が人を楽しませることを目的として作品を書いていきたいという願望があり、今までのように行き当たりばったりで書いていけば必ずどこかしら矛盾が出てきて読者の方々に不快な思いをさせてしまうこともあるということで、設定を新たに始めていきたいと思っております。

今まで読んできてくださった方、ご愛読下さった方々には申し訳ありませんがどうか温かい目で見守っていただけるとありがたいと思います。

真に遺憾でございますが、作者の都合に付き合わせてしまうことは本当に申し訳ありません。

私としても皆さんに楽しんでほしいと願っております。
どうか見捨てずにご愛読お願いします。

一つの悲劇と二つの出会い（前書き）

どうも宮内です。

今回は勝手に小説を削除してしまい申し訳ありませんでした。

ここから時間がかかるかもしれませんがしっかりと根幹のある作品を投稿していきたいと思います。

それでは――

一つの悲劇と一つの出会い

さて、ある物語をここに記すとしてよう。
始まりは今から5年前。

場所は学園都市のとあるマンションの一室から始まる。

それは何の前触れもなくやってきた。
その日彼はそこで家族と食事をするといういつもと変わらない団欒を過ごしていた。

3LDKのその部屋は広く、四人家族といえど広々と快適に暮らすことのできる部屋だった。

彼の家族は彼を除いて父、母、鮮やかなピンク色の髪をした妹で構成されたごくごくありふれた家庭であり、そこには不満など一切ない幸せな光景が溢れていた。

大きなリビングには大きなテレビがあり、その前にはテーブル。テーブルを挟むように四人掛けのこれまた大きなソファが置かれた場所。

彼と妹は早々と食事を終えてテレビの前をゲームをするために占領していた。

二人はレースゲームで対戦していて、定期的に勝った負けたの言い合いが家族の過ごす場所に明るい光を灯していた。

それがいきなり恐怖に塗りつぶされたのは何時のことだったろうか。彼はゲームに一区切りつけてトイレに向かうために席を立った。

リビングを通り部屋に入るための扉が左右に続く。
そして、彼がトイレのドアノブをひねろうと手をかけた時だった。

突然ガンツ！ガンツ！と立て続けに二度大きな音が廊下の突き当たりにある扉を大きく二度揺らした。

その時彼は恐怖を感じた。咄嗟にドアノブをひねり、電気も点けな
いままにトイレの中に飛び込んだ。

彼がボタンツと力いっぱいトイレのドアを閉めた時、三度目の大きな音が聞こえて金属が何かにあたるような音も少し遅れて聞こえた。

そしてその音が聞こえてくるまでにどのくらいの時間が経っただろう。

電気を点けなかったため、真っ暗な闇の中に放り出された彼にはほんのコンマ1秒の時間が永遠に感じてしまうほどに。

何かが小さな爆発を起こしたように乾いた音が連続で数えきれないほど聞こえた。

幼い彼にはそれが何の音かは分からない。でも、その音はよくない未来を齎すものだと思っ
て暗闇の中で身を屈める。

そこから音が止むまでも彼にとっては長い長い時間だった。

少年は塞いでいた耳から手を離し、恐る恐るドアノブのあるであろう場所に手を伸ばす。

でも、少年がドアノブに手を当てる前にカチャツという音が聞こえてドアが開いていく。

『見つけたぞ』

見知らぬ服を着た男が目の前に立っていた。

少年は何でこの人が自分の家にいるんだろう。と。当たり前疑問を浮かべようとしたがその前に伸びてきた手に腕を掴まれ無理やり暗闇の中から引きずり出された。

『…ひっ…！』

少年が悲鳴にもならない声を上げるとその光景は見えてきた。

いつもの見慣れたリビングがいつの間にか赤い壁紙、赤いカーペットに変わっていて。

そして…

地面には同じように赤く塗装された人間の残骸が所狭しと散らばっていた。

少年は何が起こったかすぐには理解できなかった。

でも、見てはいけなかった。

でも、見てしまったから。

朱で塗りつぶされた部屋の中でもその存在を主張するように映えるピンク色の髪の毛を。

瞬間、少年の頭は唐突に理解した。

理解してはいけなかったのに。

理解した。

床に散らばる人間の残骸は今さっきまで幸せそうに笑っていた家族の残骸だと。

『では、死ね』

少年の後ろからカチャツという重々しい音が聞こえた。
正確には少年には聞こえていなかったが。

後頭部に熱い金属が当てられる。

この銃が人間を肉片に変えたのだろう。

部屋にいる他の見慣れぬ服装をした人間たちも同じ。

まだ銃口から煙が立ち上っていた。

でも、少年にはもう見えない。

何も彼は感じない。

『う…、うあああああああああああああああああああ
あああつ!!!!!!!!!!』

少年は持てる限りの力を使って叫んだ。
そして時計の針は5年後にまた進む。

19 JULY PM 15:06

その日。

7月19日は快晴だった。

まだ夏真っ盛りでもないのに太陽は、え？もう待つてられないよ？
とても言いたげに強い日差しをギンギンと北半球に撒き散らしていた。

ビルの壁面に掛けられたディスプレイが今日は猛暑日になるでしょうと聞きたくもない情報を垂れ流していく。

その言葉通り道を歩いている学生たちも半袖のシャツを着ているというのにぐったりしていて誰も彼もが汗をぐっしょりとかいてシャツを濡らしている。

そんな光景の中暑さをものともせず涼しげな顔をして歩いている少年がいた。

年の頃は15、16ほどで服装は別段変わった所はない。紺色の制服のストラックスに校則破りであろう真っ白なシャツをストラックスの中に入れることを拒否した全だし。

髪は染め上げられた茶髪を傍から見たら女性と見間違っ程襟足やもみあげは肩に届く程度に長かった。

顔は日本人離れした白。これまた女性と見間違っほどに中世的な顔立ちで、街頭に立っていればスカウトされてもおかしくないモデル体型の持ち主だった。

その少年の名は かみなぎ 神風 やくも 八雲

とある高校に通う立派な高校一年生だ。

そんな彼が何故学生にとって貴重な放課後に連れも連れずに歩いているのには理由がある。

それはここが学園都市であるが故だ。

ここ、学園都市は東京西部の土地を使って作られた学生のための街。東京都の3分の1程の広さの街に230万人が居住している。その8割が学生。

そしてそこに住む学生が勉強することが、超能力。

ここでは科学によって誰にでも能力開発が施せるようになり、科学の進歩は学園都市の外と比べて20年から30年の開きがあると言われている。

その証拠に街中にはドラム缶に車輪を付けただけのような形をした自動清掃ロボが所狭しと駆け回っているし、最先端の技術を試すために店にはそれらが格安で売られていたりする。

そしてここは今世界で最先端の技術を終結した科学の総本山になっているのだ。

神風八雲が行動を起こしているのもそのせいだったりする。

世界最先端の技術は学園都市の外に漏れないようにするために学園都市は外部との接触を極端に嫌っている。

つまり外の世界には未だに最先端の技術は出て行っていないのだ。

未知の技術は莫大な金を動かすことができる。

人間は金に弱い。

人間の怖い所はここだ。

例えば未知の技術を学園都市と敵対する外部の組織に売り渡したりすれば莫大な報酬が手に入られるし、未知の技術を開発しさえすれば学園都市の中にも座っているだけで金が転がり込んできてしまう。

もちろん外部に技術を持ち出したりするのは犯罪であるし、さらに

性質が悪いのは新たな技術を生み出そうとするために非人道的な実験が行われること。

それが学園都市の闇。その闇の中では罪のない人間が日々どれだけ死んでいくのか分からない。

そしてそんな闇を消し去るために学園都市統括理事会目下暗部組織がある。

その暗部組織の一つ。

——『ドロップ』

神風八雲がリーダーを務めるドロップも学園都市の闇の中で蠢いているのだった。

『ドロップ』の構成員はたったの二人。

神風八雲と特徴的な蒼い髪をした少女の二人。

少女についてはまた後で触れるとしよう。

八雲や今日も学園都市に巣食う闇を潰すために動いていた。

正確には動こうとしているだが。

彼は学園都市の中心部に位置する最も多くの学校が集まっているとされる地区。第七学区の町の中を歩いていた。

目的地は同地区内に存在するとある研究所。

そこに彼は向かっている道中である。

彼は携帯を開き、先程送られてきた依頼内容のメールを開いて決行時刻を確認する。

メールの文面には『17時決行』と絵文字も何もついていない文面が映し出されている。

彼はついでに現在時刻を確認する。

『15:06』

まだ2時間弱の余裕があるため八雲はのんびりとした仕草で携帯をポケットの中に落とした。

「さて、どうするか」

実際、彼の実力を持つてすれば研究所の一つや二つは軽く潰せるが特に急いで仕事を終わらせる気もない。

ゆっくり散歩でもしながら夏空の下でも満喫しようと考えて彼は出来るだけ緑の多い歩道を通って歩くことにした。

「……だろお？」

彼がそう決めた瞬間。近くの路地から気持ちの悪い男の猫なで声が聞こえてくる。他にもいくつかの笑い声や甘く誘惑するような声が聞こえてきて八雲の感情を逆なでする。

「気持ちわりい……」

つまらなそうに呟くがその顔は怪訝そうに眼を細めていた。

（暇つぶしくらいにはなるかもな）

そう思いつつ暗い路地の中に八雲は入っていった。

19 JULY 15:07

太陽の光も差し込まない路地の中で一人の少女が数人の男に取り囲まれていた。

どうやら男たちはナンパしているようだが少女は無表情でその言葉

が聞こえていない振りをして俯いているだけだった。

声をしきりにかけられている少女は年は高校生くらいだろうか。恰好は白いブラウスに濃い赤のサマーセーター。淡いピンク色の髪を腰に届く長さまで伸ばし、髪が顔にかからないように可愛らしい花飾りをあしらった髪飾りを左右対称につけている。

身長も女性にしてはそれなりにある。160中間くらいだろうか。スタイルもよく綺麗に澄んだ藍色の瞳を持つ。

誰もが文句なしに美少女という程の容姿を持っていた。

ナンパされる理由は分かるが今回ばかりはナンパしてきた相手が悪かった。

スキルアウト。

俗にいうゴロツキどもだった。

「なあ、いいだろ？　優しくしてあげるからさあ。一緒に遊びに行こうよあ」

「そうだぜ？　でないと俺らもそろそろ堪忍袋の緒が切れちゃうよあ？」

男たちは気持ちの悪い猫なで声で少女ににじり寄っていく。

それによって少女も押されるように下がっていくのだが、トンつと壁に背中が当たって逃げ道がなくなる。

「へっへっへ。じゃあそろそろ楽しませてもらおうかなあ？」

スキルアウトの一人が舌なめずりをしながら更に少女ににじり寄っていく。

「…っ！」

少女は条件反射で体をかばうように小さく身を縮ませる。
男の手が少女の体に触れそうになる。
その時だった

「気持ちわりいんだよ」

まったく言っていない程に感情の込められていない声が響いたのは。

「ああん？　なんだてめえ」

少女に手を触れようとした男が声の発生源に意識を向ける。

少女はそつと目を開けてみると他の男たちもそちらに気を取られているようでこちらを向いているものはいなかった。

少女は視線を移して声の発生源を追ってみる。

そこには自分と同じくらいの年ごろの少年が何も興味のなさそうにスキルアウト達と対峙していた。

19 July 15:09

八雲は第七学区のとある路地の中央に立ち、数人の男たちと対峙していた。

その理由は

「昼間つからにゃあにゃあ気持ちの悪い声出しやがって。てめえらは発情期の猫ですか？　ってんだ。折角人が散歩を楽しもうとして

るってのにうぜえんだよ」

ということである。

もちろんこんなことを言って不良たるスキルアウト軍団は黙っている訳もない。

「なんだと！？ 黙ってりやあ付け上がりやがって！！ おい！ やっちまうぞ！！」

と言って気合の入った声で八雲に飛びかかるうとしている。

彼はここまで路地を入ってくるまでの間、欲望ダダ漏れ状態のスキルアウト共の発した声を聴いていたのでうずくまってこちらを見つめる淡いピンク色の髪をした女性に目を向けた。

見たところ外傷や何かされたという形跡はない。見た所自分と同じ年頃の少女の样だった。

「何よそ見してんだゴラァ！！」

先頭切って大柄の男が勢いよく殴りかかってくる。そして

「…暇つぶしくらいには…なってくれよ？」

八雲の繰り出した右アッパーが綺麗にカウンターとして決まり、大柄な男は後ろに勢いよく2、3メートル吹き飛ばされた。

「…は？」「…」

吹き飛ばされた以外の男たちが間の抜けた声を出した。

吹き飛ばされた男は大柄で、明らかに自分たちの1.5倍くらいの体重は軽くある。

それを目の前のスラッとした細いシルエットの少年が一撃で2、3メートルも吹き飛ばしてしまえばそれは固まってしまっただろう。

「さあて、次にお掃除されたいのは誰だよ？出てこい」
乾いた声で挑発する。

すると

「くっ…そおお！！ スキルアウト舐めてんじやねえぞおお！！」
先頭の男がやられたことによつて先頭になつてしまった男が掌に炎の球を作り出して吠える。

「ははははは。びびったかあ？ 俺はLEVEL3の能力者だ。てめえなんぞに負けるわけねえだろうがあ！！」
先頭になつた男は勝ち誇つたように笑みを浮かべて高らかに笑い転げる。
でも

「だあかあらあ、んなのがどうしたつてんだよ？ 面倒くせえからさつさとかかつてこいつつの！！」
八雲はひるまない。
むしろ力を見せビラかしたただけで勝ち誇つていた男にイラついた声を投げつけた。

「なんだよ…？ 女の前だからって無理に強がつてんじやねえよ三下ああ！！」

自分の力に絶対の自信を持っていた男の心は揺らいでいた。目の前の少年があつさりとその力が存在することを受け入れてしまったから。

手に炎を携えて男は突進していく突進していくが…、
その炎は跡形もなく手の中で消滅していった。

「はあ？」

訳も分からず男は今まで炎の存在していた手を見つめる。

そして彼は意識が暗転した。

八雲は炎の能力者を子供をあしらうように叩き伏せ

「やっぱ暇つぶしにもなんねえよ」

と、残ったスキルアウト達を見据えた。

瞬間、八雲の体が4メートル程宙に舞う。

そして一番前の男に踵落とし。次の男には腹にひじ打ち。

その動作は数秒という時間すらかからず淡々と行われて――

この場で立っているのは八雲だけになった。

「はっ！ 粹がってたくせにこんなもんかよ。つまんねえな」

少女の近くで最後の一人を地面にたたき伏せた彼はつまらなさそうに呟いた。

「ありがとう」

少女のものである柔らかない声が響いた。

八雲がそちらに視線を移すと少女は立ち上がってこちらを見ているようだった。

「あなたの名前は？」

また、少女の柔らかない声が響いた。

それに対し八雲は

「知る必要もねえだろ？無事でよかったな、気いつけて帰れ」

つまらなそうな声で別れを告げる。

もちろん彼は心からつまらなかったと愚痴をこぼしてその場から離れようと少女から離れようとした。

けれど、ガシツと掴まれた腕が離れることをよしとしていなかった。彼が何の驚きも現さない表情を少女に向ける。

すると鼻先がぶつかりそうな距離まで少女の顔が近づいて来ていた。
「なっ……」

その行為に八雲もさすがに驚きを隠せなかったのか怪訝そうな表情でできるだけ彼女から顔を離れた。

「ねえ……名前」

「は？」

彼は一瞬何を聞かれたか分からず素っ頓狂な声を出した。

鼻先が触れそうな程に顔を寄せられた彼はそのことにしか頭がいつていなかったからしょうがない。

対する少女はそんなことはどうでも良さそうに。表情の作られていない顔で説明するように

「名前は？」

言った。

19 July 15:20

その後、八雲は第七学区にある高いことで有名なホットドッグの屋台にいた。

遡ること数分前。

少女に

『あれ食べてみたい』
と言われたからだ。

嫌々彼女に付き合わされつつ、ホットドッグを買いに来てみれば（パシリ？）なんとホットドッグごときが2000円というインフレもびつくりな値段で売られていたのだ。

冷静に考えてこんなものを買う奴はいないが、出てきた現物を見て八雲は更に目を丸くした。

そこの屋台で売っているホットドッグと何ら変哲のないものが二つ出されてきたからだ。

こんなもの普通の金銭感覚を持つ八雲ならばまず買わない。

（むしろ買う奴なんていんのかよ…？）

と心ではばやきつつ少女の待つフードコートの席に戻ることにした。

「遅いね」

フードコートに戻った八雲を迎えた第一声はそれだった。

人をパシリのように扱っておいてそれはないと思う。

「それが初対面でホットドッグを買って来てやった人間にける言葉か？ お前ってどういう神経してるんだよ」

はあ、とため息をついて少女と反対側の席に腰掛ける。

ホットドッグを手渡すと、何がおかしいのかジロジロとホットドッグの観察を始めた。

「なんか普通だね。こんなのが二千円もするの？」

「するんだよ。こんなの普通だったら買わねえぞ」

訝しげに目の前の少女は言葉を発した。とは言うものの少女の顔には相変わらず表情といったものがでない。

むしろそっちの方を訝しげに八雲が見ているとふいに少女と目があつた。

「なに？」

「いや、お前って何してても全然表情が変わらないなって思ってたな」
そう言っただけはホットドッグにかぶりつく。見た目が他のホット
ドッグと変わっていない分、味にも期待はしていなかった彼だが、
その予想は見事にぶち抜かれた。

「…美味しいな」

見た目は普通のくせに味だけはなかなか美味だった。

肉や野菜は高級なものを使っているのかもしれない。それだったら
二千円の額にも合点がいくな、と。八雲が考えていると

「それはこっちの台詞」

と少女が言った。

「ん？美味しいって言葉はお前が言いたかったのか？言いたきゃ言や
あいいじゃねえか」

その声に反応して答える。

すると少女は

「そつちじゃない」

とまた顔に表情を出さずに

「あなたにも表情なんてないよね？それはあなたが言ったように初
対面の人間にかける言葉じゃない」

言った。

八雲も確かに感情を表に出すことなどない。

纏っている空気や言葉から大体の情報は入ってくるがそれまでだ。

でも、目の前の仮面を被ったような少女にそんなことを言われるの
もどうかと思う。

お前の方がよっぽど理解不能だろ、と呟いて彼はもう一口ホットド
ッグにかぶりついた。

「そういえばまだ名前を聞いてなかったな」

任務まで時間には余裕がある。少女との会話が暇つぶし程度にはな
るだろうと初対面の人間が普通に行う自己紹介でもしてみること
にした。

少女は口に含んでいたものを飲み込んで

「舞葉まいは 雫しずく」

と名乗った。

「舞葉雫ね。ちなみにどこの高校だ？ 見たことない制服だけど」
とりあえず暇つぶしの獲物を逃さないために辺り障りのない質問を
してみる。

少女とはいっても立派な女性だ。いきなり年を聞くのもマナー違反
だろうと彼は常識的なことを考えてみた。

「知らないのも無理ないと思う。私は第13学区の高校に通ってい
るから」

と少女は告げる。

すると、何かを思い出したように彼女は立ち上がった。

「どうした？」

八雲は突然立ち上がった少女に当然の疑問をぶつけてみる。
すると

「もう、行かなきゃ」

と返ってくる。

「そうか。何か用事でもあったのか？」

八雲がそう聞くと少女は一瞬だけ悲しそうな顔をした。

いや、八雲はほんの一時間にも満たない付き合いだがこの少女が表
情を持っていないことを知っていた。

でも、そう見えた。

「うん。もう、行かないとあなたに迷惑かけちゃうだろうし」

「それは…どういうことだ？」

意味深に告げる少女の言葉に疑問符を投げつける。

しかし

「何でもないよ。わがまま言ってごめんなさい。楽しかった。それ
じゃあ…」

少女はなんでもないと。言って走り去って行く。

彼女の言っていることが嘘か本当か確かめる術はない。

だから、八雲は少女を追いかけることはせず、その場に留まった。
「変な奴」

と呟いて、少女の走り去った方を向きながら立ち上がる。
そこであることを思い出した。

（名前、教えてなかったな）

そう思いながら、どうせまた会えるだろ。と思考する。
だが、そう思考したことを八雲自身気づいてはいない。

時刻はPM3:40――

19 JULY 16:52

八雲は第七学区に存在するとある研究所の前にいた。
傍らには蒼く長い髪を後ろで一つにまとめたポニーテールの少女が
いる。

少女の名前は御影^{みかげ} 冷夏^{れいか}。

こんな真夏にも冬服である紺のブレザーを着こみ、さらには髪と同
じ色のマフラーを首に巻いている。

「開始まで8分。もう始めちゃってもいいんじゃないかなあ」
つまらなさそうに彼――神風八雲は呟く。

その呟きに反応するように傍らにいる少女が口を開いた。

「まだ駄目よ。上がデータのハッキングに成功するまで待つて。私

たちの仕事は上がデータの回収に成功した後、研究所を襲撃。解体が目的だから。定刻前には連絡があるだろうから我慢して」

「はいよ」

冷夏の制止にやる気のない声で答える。

作戦開始まで後7分――

と、その時。

何やら物珍しい目で冷夏がこちらを見ていることに気付いた。

「何だ？」

率直に疑問をぶつけてみる。すると彼女はふつと微笑み

「何だか機嫌良さそうね。あなたがそんな顔してるの初めて見た」

「何のことだ？ 俺はいつもと変わらない」

「ううん。いつもと違う。あなたって感情を表情にすることはなくせに今日だけは口元がにやついてるよ」

「そうか？」

表情がないなんて一日に二度も言われると思わなかったと思いながら疑問に感じて自分の口元に手を触れてみる。

特に変わった様子はない。頬の筋肉も引きつっているわけでもないし力を入れているわけでもない。

「まったくいつもと同じだと思っただけがな」

心の底からそう思った。

すると何がおかしかったのかフフッと今度は声に出して彼女は笑った。

「それはあなたが気づかないだけよ。感情なんて出さなくても二年一緒にいた私にごまかしは効きません」

まるで弟に話しかけるような口調で話す彼女に、同い年のはずなんだけどなと八雲はこぼした。

「確かに同年だけどなんか放つとくと危なっかしいから、あなた
つて。それより、何かいいことでもあったの？」

彼女は何かあったんじゃないかと少し。いや野次馬根性全開で聞い
てくる。

八雲は今日あったことは何かと思考して

「変な女に会った」

と答えた。

冷夏は変な女？ と鸚鵡返しに訪ねてくる。

「ああ。チンピラに絡まれてる所を助けてやったらいきなり名前聞
かれたり、2000円なんつー馬鹿げたホットドッグ買わされたり、
あげくの果てには向こうも人形みたいに表情変わらないくせに、『
あなたにも表情ないよね？』なんて言つてきやがった。思い出すだ
けで腹立つ」

頭をカリカリ掻きながら今日起こった出来事を話してみる。

すると彼女はへえー、と感心したように声を上げて

「あなたがそんなに誰かのことに気にするなんて珍しいじゃない。も
しかして…その子に惚れちゃったとか!？」

「はあ!？ どこをどうたどればそんな答えに行きつきやがんだよ。
単純にむかつくだけだ」

どこか期待の眼差しを向ける彼女の言葉に反論する。

すると彼女はうーん、と唸りながら顎に手を当てて考えるポーズに
入った。

「何だよ？」

「うーん。やつぱり、それでもあなたがそんなに感情を表にだすな
んて珍しいよ。私もその人に会ってみたいかな」

笑顔で彼女はそう告げる。

その笑顔にやれやれと頭を掻くことしかできなかった。

そしてバイブが鳴ったような音が冷夏のポケットから聞こえた。
彼女は携帯を開きもせずに横に付いたボタンでバイブを止めると

「仕事よ」
と言った。

19 July 16:59

第七学区の研究所内。

そこでは数人の白衣を着た研究者たちがパソコンからの光のみで照らされた部屋の中で行き来していた。

この研究所で行われているのはとある能力の抽出実験。

簡単に言えば学生の持つ能力をその体から引っ張り出し、違う個体。例えばコンピューターなどにその能力を落とし、好きな時に誰でも使用できるようにしようというモノ。

だが、能力を引っ張り出すということが問題で能力を体から抽出するためには能力使用の根幹を司る脳をいじらなければいけなかった。それは生み出された正規の手順を辿ったとしても被験者には多大な負担がかかるし、手術後に後遺症が出る可能性も高い。

もちろんそんな実験に協力しようという人間はおらず、凍結の危機さえあった。

しかし、それを解消したのが『チャイルド置き去り』の使用であった。

『置き去り』とは学園都市に入れた子供の教育費を親が払わずに蒸発したり、いなくなってしまう孤児たちのこと。

親が学園都市に子供たちを置いて行くから『置き去り』。身寄りのない子供たちに人権なんてない。

それをいように利用し、再び実験は再開されたのだ。

実験はこれで進展していくかに見えた。

しかしダメだった。

『置き去り』たちが死ぬまで実験を行おうと能力の抽出なんて欠片もできなかった。

科学者たちは悩みに悩んだ末、とうとうその方法に至ってしまった。
『人間の脳を生きたまま取り出し使用する』という方法に。

この非人道的な実験が統括理事会の目に止まってしまいこの研究所は秘密裏に処分されることになった。

上もこんな非人道的な実験が行われていたことが漏れれば信用はがた落ちなので秘密裏にすべてを抹消することを決めたのだった。

もちろんそんなことは研究者の耳に入ることはない。

今も何かに憑りつかれたようにパソコンとにらみ合っているものがほとんどだった。

「よし！ 実験は成功する！ すぐに適正検体を連れてこい！ 仕上げの時間だ」

初老の研究者がパソコンから目を離し、他の人間に支持を出す。

その時研究所全体に大きな振動とけたたましいアラームの音が鳴り響いた。

『警告 侵入者デス 総員ハスグニ退避シテクダサイ 警告』

「侵入者だと！？ まさか…統括理事会のか？」

研究者は青白く冷めた顔で震える声を発した。

自身の未来を知ることなく。

19 July 16:00

「それじゃあ早速、派手に始めるとしますか」

八雲は閉ざされた正門前に置かれたトラックのエンジンに自身の腕を思いっきり突き刺した。

もちろん燃料がどくとどくと流れ出してくる。

その光景を見て、冷夏は

「相変わらず便利な能力ね。…あなたを見てると感覚がおかしくなりそう」

と笑みを浮かべた。

「気にすんな。俺の力はいろいろと応用が効くんだよ。だから」
ふわつとガソリンを漏らしたまま車が宙に舞い

「即席手榴弾だ」

そのまま閉ざされたままの正門を飛び越えて研究所の敷地内に放物線を描きながら飛んでいく。

そして――

壁にぶつかって火花が散った。

瞬間、ドオオオオオオオオオオオオオオンという轟音と共に赤い爆炎が空高く舞上がった。

「行くぞ」

「ええっ！」

二人は爆発の余波で破壊された正門を通じて内部に侵入する。

最初の爆発で多くの警備が死んだのか、見えてくるのは全て炎に包まれた黒いものだった。

しかし、普通の人間なら吐き気をもよすおような惨状の中、二人は平然と走り続ける。

「所内の地図は？」

「頭に入ってる！」

「じゃあ、頼んだぜ。凄腕の『^{ムーブポイント}座標移動』さん」

走りながら八雲は冷夏の肩に手を乗せる。
そして二人の姿がその場から消えた。

そして場所は研究所所内。

そこには未だに慌てふためく研究者たちの姿があった。

「おい！ 早くデータを運び出せ！！ それと検体からの能力抽出は終わったか！？」

「はい！ 進行度97%。後20秒で完了しま——」

「はっ！ クズがゴロゴロ転がってんじゃねえか」

突然部屋の中に無機質な声が広がり、モニターに目を向けていた研究員の声が止まった。

その場所は入口とは反対側に位置する場所であるはずなのに、こつ然と現れた少年と少女が佇んでいた。

「ひ…っ、ひい…っ！」

モニターを見ていた研究員は突然のことに腰を抜かす。

そんな彼の胸にはすでに刃渡り20センチ程のナイフが突き刺さっていた。

「そんな腰抜かすなよ…って、もう聞こえないか」

「何だ貴様は！？ 何処から入ってきた！？」

初老の研究員は叫ぶ。

「そんなに知りたいなら教えてやるよ。暗部組織——『ドロップ』だ。俺たちがここに突然現れた理由なら、ここが学園都市であることを考えれば分かるだろう？」

八雲はナイフをもう一本取り出し指でくるくる回しながら研究員を見る。

感情を移さないその目で

「つてな訳で」

天罰を降すように

「死んでくれ」

死刑宣告を降した。

その瞬間、先ほどまで研究員の一人が見ていたモニターからピーという機械音になった。

[illegible]

それを聞くと初老の研究員が嘲るような笑いを天に届けと言わんばかりにした。

そして

「残念だったな。貴様らにはここで死んでもらう。おい！」

その研究員がすぐそばに控えていた男に声をかける。男はヘッドホンを取り出して研究員に手渡した。

「ははっ、君たちはこれが一体何なのか分かるかい？」

ヘッドホンを手にした研究員は笑みを浮かべながら問いかける。

そして

「我が研究の成果だよ」

轟つという音と共に八雲たちへと紅蓮の炎が男の手から射出された。その炎は二人を一瞬で飲み込み、部屋にあつたモニター等の機材を飲み込んでいく。

「はっはっはっはっは！！　これは素晴らしい！　学会に発表すれば表彰ものだ！」

いつの間にかヘッドホンをしていた男は高笑いしながら自分の勝利を確信していた。

しかし

「んな歪んだ過程で得た結果を……誇れんのかよ」

業火に焼き尽くされた先から男の声が聞こえた。

研究員ははっとして炎の中へと目を凝らす。

「…なっ…！？」

そして高笑いから一気に絶望の色を顔に浮かべた。

「汚いな。貴様の心は真っ黒に汚れちまってんぞ」

炎の先に…死んだはずの二人の人間が立っていたからだ。

「何故…何故貴様らは生きている！！ 私の業火をもろに喰らって生きているはずがない！！」

研究員は狼狽えながらも再度炎で二人を燃やし尽くそうとする。何度か、何度も何度も何度か。

そんな業火の中で八雲は平然と

アウトランダー
「拒絶反応」

「それが俺の能力の名前だ。冥途の土産に持って行け、エセ科学者が」
言った。

その瞬間、辺りを包んでいた炎が形を変え始めた。

ある一点に集まるように八雲の目の前に赤い球が出来上がっていく。

もはや為す術もなくへたり込んでいる研究員をよそに八雲は話しかける。

最後の子守唄を。

「他人の力を奪って、強くなったつもりか？この三流野郎。てめえには今まで苦しんできた実験体にされた奴らの分まで地獄の苦痛をくれてやる」

集まりきった炎の球はゆっくりと、腰を抜かした研究員に向かって

いく。

ゆつくり、ゆつくり。

研究員の体は焼かれ始めた。

「ぎゃあああああああああああああ！！！」

断末魔が所内に響き渡る。

焼かれながらも必死で炎から脱出しようと彼は試みるが、何故か級の中から脱出できない。

「汚ねえ断末魔だ。だが、生きる権利を剥奪したてめえにはお似合いだ。三流」

八雲が冷夏の肩に手を置く。そして、二人は炎によって浸食され始めた部屋から脱出した。

差し出された手は掴めない（前書き）

どうもー宮内です。

寒いですね……。

こたつ欲しいです……

切実です……。

とにかくみなさん風邪をひかないように体調管理はしっかりしてください。

それではどうぞー

差し出された手は掴めない

19 July 17:32

八雲と冷夏は研究所の消去が完了するとすぐにその場を離れて人気のない裏路地まで来ていた。

「仕事は終わったぞ」

「そうか。ごくろうだったな、さすがは『ドロップ』だ。手際がいい」

八雲の耳に当てられた携帯から明らかに合成音声だと分かる声が聞こえてきた。男の声をしているが、電話の先の相手には会ったことがないので男か女かは分からない。

「報酬はいつもの口座に頼んだ。研究所に拉致されていた『置き去り』に関してはコードCの場所に移動させておいた。人目に付かない場所だが、早めに人を寄越してくれ」

「分かった。すぐに手配しよう。ああ、それと一つっておくことがある」

「何だ？」

「調査だ。おの研究が別の研究所に持ち込まれて未だに続けられている可能性があるらしい。それらをリストアップしたデータを転送する。できるだけ早く探してほしいとの上からの要望だ」

「残業かよ」

『そういうことだ』

はあ、とため息が一つ零れ落ちる。そこで彼は電話を切ろうとした。だが一つ、頼みたいことがあったことを思い出した。

「なあ」

『何だ？』

電話の声が怪訝そうに歪む。大方、何か文句の一つでも言われると思っているのだろうか。生憎と自分はそんな人間ではない、と八雲は考える。

「墓を一つ、用意してくんねえか？」

『墓？　だと？』

怪訝そうな声は不思議なことを聞いたように疑問の色を深くする。

「罪のない女の子が実験の犠牲になった」

『…そういうことか。お前の頼みだ、引き受けよう』

八雲の言葉に何かを悟ったのか、少し優しい口調になったその声は不思議な頼みを受け入れた。

「悪いな、いつも世話になる」

『いいということさ、私もお前のおかげでいい思いをさせてもらっているからな』

電話の声は少し笑った。

「じゃあこれからいくつか回ってみる。あんたには借りもあるしな」
『ああ、それでは』

それで電話は切れた。
ツーツーという音がどこか寂しそうに鳴っていた。

「はあ」

またため息をついた。
体が疲れているのか少し怠い。
ポケットにとりあえず携帯電話をしまった。

「やっぱり、まだ忘れられないのね」

冷夏が話しかけてくる。

その声が少し陰鬱な空気を含んでいるように思えた。

「ああ…まだ、な」

心の真ん中がうずく。
痛みから救ってほしいとあがくように。

「大丈夫？ 顔色悪いよ」

どうやら表情にまで出てしまっているようだ。言われて近くの窓に映った自分の顔を見してみる。
ひどい顔だ、と窓に映し出されたひどく疲れたような顔に語りかけるように呟いた。

「…過去は過去。今更戻って来やしない…」

「八雲…」

冷夏が心配そうな声で話しかけてくる。彼女の顔を見ると、やはり心配の色が浮き出ている。

「あのことを思い出すたびに、ないはずの感情が顔を出す。…感情なんて…捨て去ったと思っていても、な」

八雲は今日、久しぶりに悲しみを思い出した。

19 July 16:06

時間は遡り、ここは第七学区のとある廃工場の中。

そこでは何を作っていたのか天井にはたくさんの航空機のパーツらしきものがワイヤーで吊るされていた。

床にも土台となる部分の溶接されなかったパーツが散乱していたりする。

そんな廃棄部品の山の中に人影が一つ。身を隠すように屈んでいた。

腰に辺りまで伸ばしたピンクの髪に、赤いサマーセーター。

舞葉雫は今まで走っていたのか、ゼエハアと肩で呼吸していた。

彼女のブラウスの左腕の部分が何かに切り裂かれるように破かれており、赤い線が刻まれていた。

彼女は腕の傷を覆うようにしてハンカチを巻き始める。

時折、入口の方に目をやっでは治療を続けた。

一応の手当を済ませ、少女は入口の方へ再び視線を巡らすと、

「ようやく見つけましたよお雫さん」

若い男の声が自分が見ている方向とは真逆の方から聞こえてきた。焦ったように彼女はそちらに視線を向ける。

すると、まだ幼さの残る少年が友好的な笑みを浮かべて地面に積まれた廃棄部品の山の上からこちらを見下ろしていた。

「…っ！」

突如として現れた少年に焦燥の色を彼女は浮かべた。

その表情の変わらない整った顔にまでくつきりと。

「まったく。手間かけさせてくれますよねえ、あなたは。最初に拉致した時ですら大変だったのに。さあ、今度こそ一緒に来ていただきますよ」

少年は雫の焦燥になど目もくれずに、友好的な笑みを残虐的な笑みに変えた。

瞬間、轟ッ！という音と共に廃工場の壁を何かが揺らした。

既に砕け散った窓ガラスがガシャンと音を立てて全て砕け散る。

そして、何かの正体が二人のいる廃工場の中に充満した。

風――

嵐のような風が吹き荒れて天井に吊り下げられたパーツを揺らす。

「もう…逃げられませんよお!!」

少年は狂気の笑みを零に向けた。すでに彼女は走っていた。入口と定めていた廃工場の出口に向かって。

少年は風を操り、入口の上にあるパーツを落とそうとする。しかし、何を誤ったか。

落ちてきたのは少年の真上にあつたパーツだった。

19 July 18:03

第七学区に存在している廃ビル群の一つに向かっていた。目的は休憩、彼は何かあると必ずと言っていい程そこへ赴いていた。

（まだ仕事する気分じゃねえなあ）

そう思いながら彼は一つのビルの階段を昇り始めた。

表通りからそう離れていない場所なのか、何やら歌が聞こえる。

それをBGM代わりに聞きながらゆったりとした動作で階段を上がり続ける。

2階、3階、4階――

上がっていくにつれて聞こえてくる歌がはつきりと大きくなってい

く。

屋上が近いからか。

特に考えるべき事柄も思いつかない彼の頭はそう思考した。

先程の悲しみも今や心のどこかへと葬り去られてしまったようで、
今はその歌に聞き入っている方が心地よかった。

8階――

後1階階段を上がって行けば屋上に到着する所で、彼は異変に気付いた。

（この歌、表のディスプレイの音と被ってやがる……。誰かが歌っているのか？）

そう。表通りにある大型ディスプレイは既に歌ではなく別の話題に切り替わっているのが聞こえた。それでも歌は消えようとしない。むしろサビを控えてさらに音が大きくなっていくようだった。

彼は引き込まれるように最後の階段を昇り、屋上のドアを開けた。

ひゅう、と屋内に風が流れ込んでくる。

それに目を瞑ることもなく、その先に見える光景を彼は見据えていた。

「優…葉…？」

思わず、呟いた。

目の前にいるピンク色の髪をした少女がある人物と重なって見えたから。

と、彼はそちらに気を取られていたからか、閉じ始めていた金属の扉に肩がぶつかり――ゴンツという鈍い音を立てた。

途端に歌っていた少女は歌うことを止め、バツとこちらに振り向く。そこで彼は気づいた。歌っている少女は彼が思っていた人物とは違うことを。

「あー…驚かせて悪いな。俺だ」

その少女は八雲が今日出会い、変な女と評した人物。舞葉雫本人だった。

二人はその後並んで屋上の手すりに寄りかかっていた。

「まさかお前があの歌姫だったなんてなあ」

八雲が呟くと彼女はこくん、と首を縦に振って首肯する。

「そう。でも、名前を聞けば分かるはずなのに何で聞かなかったの？」

雫は不思議そうに声を上げた。感情は表情に出さないままにして。その左腕にはハンカチではなく包帯が巻かれていた。

「歌なんて聴かないからな。友人が言ってたことを今思い出しただけだ」

そう言っただけで彼は口から煙を吐き出す。

実は八雲は若干16歳にして愛煙家だったりするのだ。

「そう」

彼女が小さくそう呟くと少しの間沈黙が訪れる。そして抱いていた疑問を口にする。

「そんな歌姫様がなんで怪我してる？ 誰かに追われてるのか？」

ふと少女の目が悲しそうに曇る。
でも、そんなことは気にせずに

「イラつく……」

言った。

その少女は八雲に顔を向けると驚いた表情を浮かべた。感情なんて垣間見せることのなかった少女がだ。

一瞬。少女の心が突き放されたと判断する。
だが、また八雲はそんなことなどどうでもいいように、少女の考えていることとは逆のことを口にした。

「危険な目にあってんなら何でいわねえ？ 誰かに助けを求めりゃいい、友達でも、家族でも、恋人でも……俺にでも」

（チツ……何言ってた俺は……らしくねえだろ）
内心ではそう思う。思うのに——口は勝手に動いていく。

「最初に会った時だってそうだろ。お前は何かを追われるようにどっかに行きやがった。俺には何も言わないで……」
「……………」

何で勝手に動きやがるんだ？ そう思いながら更に言葉を続ける。

「もしかして俺を巻き込みたくねえとか思ったのか？ はっ！ これだからお前みたいな奴はむかつくんのだ。こっちの都合は無視して勝手に自己満足して何がいい！？」 俺は巻き込まれなくて仕方ねえ

んだよ！！ 今日出会った人間を巻き込みたくないなら何で俺と一緒ににいた？ 助けてほしかったんじゃないのかよ！！ てめえを苦しめてる暗闇から救い出して欲しかったんじゃないのかよ！？ 俺はそんな一人の人間すら救えねえクズかもしれない！！ でもよ――

――
そこまで言って止まった。

心臓がバクバクと音を立てて怒りを助長するようになっていく。

彼は自分が分からない。

何で目の前の少女にこんなにも苛立っているのか？

彼は自分が分からない。

何故目の前の少女を

救いたい――

そう思ってしまうのかが。

チツ、と舌打ちする。

いつから自分は主人公ヒーローになった？

（そんな場所から一番遠い人間がよお……）

思考の渦が彼を支配する。

でも、ふとその渦から解き放たれた。

少女の顔を見たからだ。

その人形のような白い肌に一筋の雨粒を湛えて

救ってほしい――

そう懇願している少女の顔を。

彼は唐突に理解した。

稲妻が体突き抜け一つの答えにたどり着いた。

似ているからだ。

あの―――彼が大切に思っていた人間に―――

「ダメ…だよ…」

今にも大声で泣き出してしまいそうな声で彼女は呟いた。

目の前の主人公^{ヒロ}を巻き込まないために。

救われるべきは自分の方なのに―――

「そんなあなただから…巻き込みたくなかった…。あなただったら巻き込みたいと思う？ 私は…嫌だよ…？ ここまでしてくれた人が…目の…前で…傷つくのは…」

そんな他人の救いを拒んだ歌姫^{ヒロイン}は。

涙で覆い尽くされた顔で笑った。

悲しそうに、寂しそうに。でも、どこか嬉しそうに。

感情の込められなかった顔で笑ったのだ。

その顔を見ただけで―――十分だった。

彼は―――笑っていた。

「そんな顔…できんじゃねえか」

目の前の少女がいくら救いを拒もうと関係なかった。

どれだけ自分のことを思っ
て巻き込みたくないと言っ
ていても関係
なかった。

ただ救いたい。

ただ助けてやりたい。

彼女を見ていてそう思っ
たから。

だから

「お前を苦しめるこの世の闇は——俺が拒絶してやる」

笑う。

しがみついてきた少女の体をそつと抱えて。

一体どんな扱いを受けてきたのか、八雲の言葉でここまで泣きじや
くる彼女を見るとそう思えた。

どれだけ救いを求めても誰も救ってなどくれなかったのだろうか？
そんな世界の有様が苛立たしかった。

その後は少女が泣きやむのを待つて話を聞くことにした。

自分の胸にしがみついて嗚咽を漏らす少女が大切だった人と被って
愛おしく思えた。

「なんで…？」

「何で助けてくれるの？」

涙の跡が残る顔を上げて彼女は小さく呟いた。

その言葉に優しい笑みを浮かべる。自分の意志で、失ったはずの心で。

「理由…か。そうだな…お前が俺の『大切だった』人に似ているから…かな」

「『大切だった』？」

少女が鸚鵡返しで聞いてくる。

「ああ。もう、会うこともできないけど…。あえて理由を上げるとすればそれだな」

少女の体が離れていく。

もう大丈夫なのか、という心配をよそに少女は笑っていた。

「もう…大丈夫だよ。行かなくちゃいけない。あなたは巻き込めないから…ね」

その言葉に訝しげに顔を顰める。

「まだ言うか。なんでだ？　そこまでして何で助けを拒む？」

「あなたが…殺されてしまうから」

はあ？と声を上げるしかなかった。暗部組織でも随一と謳われる力

アウトローウンダ
『拒絶反応』を持つ自分が負けるなんて考えているなんて

――。

そこまで考えて、色々あつて忘れていたことを思い出した。目の前

の少女はまだこちらの能力も名前すら知らないのだった。

「あー、そうだな。言っていないから分かんないよな。俺は序列外アウトの能力者ナンバー。LEVELは5。学園都市の頂点に立つ能力者の一人だ。名前は神風八雲。まだ教えてなかったからな、覚えておいてくれ」

「神風…八雲。序列外アウトの能力者ナンバー？」

少女は頭の上に？マークを出して首を傾げていた。

まあ、仕方ないか。と説明しようとするが目の前の少女は唐突に

「じゃあ、八雲」

「はい？」

いきなり名前を呼ばれて思わず返事をしてしまった。それにしてもいきなり呼び捨てとは。

「八雲って呼んでもいい？」

こちらの思考を読み取ったのか確認を取ってきた。

（まあ…悪い気はしねえな）

と一瞬思考して。

「ああ」

答える。

名前で呼んでくれる人間が増えたことを内心喜びつつ。

「LEVEL5の方は何も突っ込まないんだな」

と疑問を口にした。

LEVEL5と言えば学園都市に七人しかいない全学生の頂点。そこをスルーされるとさすがの八雲もどうしていいか分からないのだ。

「え？ 八雲はLEVEL5なの？」

話聞いてなかったんかい！と心の中で突っ込みつつ頷く。

「…名前にしか意識が行ってなかった…」

と少女が呟いた。

八雲はそれを聞いて

「…ぷっ…あはははははは！」

吹き出してしまう。

それを見て彼女は何が起こったか分からずきょんとしている。

「わ、悪い！ お前がこんなに抜けてる奴なんて思わなくてな。はっ…あはははははは！」

感情のなかった八雲は更に笑う。

こんなことをしたのは何時振りだろう？そう考えても何故か笑いたくなったのだから仕方がない。

対する雫は少し怒ったような顔をしていた。

「八雲、…笑いすぎだよ？」

そう言つてたしなめるも今の彼には聞こえていないようだった。
そんな彼を見て

「…っ、フフツ…あはははははは」

とうとう二人は笑い出した。

感情を持たなかったはずの二人の笑い声はそんなことなど感じさせずに一緒になつて廃ビルの屋上に響く。

「がつ…あ！」

しかし笑い声が聞こえていた屋上が俄かに曇った。
苦痛を伴った声。それを放っているのは八雲だった。

「八…雲…？」

腹のあたりが解けた鉄でも流し込まれたかのような痛みで熱くなる。
そこからは細い鉄の棒が背中側から腹を串刺しにしていた。それが
グツと引き抜かれると朱い液体が地面にぼたぼたと流れ落ちて小さな水たまりを形成し始めた。

「八雲！！！」

「来るな！！！」

走り寄ってこようとする雫を止める。
致命傷ではないものの出血がひどい。とにかく今は血を止めることが最優先だ。

（損傷した血管に拒絶の膜を張るか…。くそっ…一体、誰だ…）

出血はとりあえず止めた。

こんなことをしやがるのは誰だ？と息を荒くしながらも攻撃された方向へ目を向ける。

そこにいたのは自分よりも一つか二つ年下の、少年だった。

友好的な笑みを浮かべながらもその手には真っ赤な血が付いた細い鉄の棒を持っていた。

棒を引き抜いた時に血が噴き出したためか、服や顔のあたりに返り血がついていて。

友好的な笑顔なのにそれがひどく残虐な笑みに見えた。

「いやあやってみるものですねえ。そこ等辺に落ちていた傘の柄。テレビで報道されていた通り良い凶器になりますよ」

宙に浮く少年はその血が付いた傘の骨組みだったものを舌で舐める。その行為に雫は怪訝そうな表情をした。

「てめえっ…一体何の用だ…っ？」

血は止めたものの痛みは拒絶できない。今も焼けるような熱さが脳を刺激する。

そんな中、笑みを湛えた少年はやれやれといった表情で

「あなたに用はないんですよ。あるのはあなたの後ろにいる…彼

女だ」

用もないのに刺した。それだけでその少年の異常性が伝わってくる。人を殺すことを何とも思わない人間。つまり学園都市の闇に巣食う者――。

「暗部の…クズ野郎ってことか…？」

「へえ…。あなたがそれを口にするということは暗部の人間の様ですね…。フツ…。まあ、僕たちは統括理事会からはすでに切り離されたから知らないでしょうし、名乗っておきましょうか」

宙に浮きながら少年は目を閉じて

「『元』暗部組織。『ケーブル』のメンバーですよ。どうかお見知りおきを。そして…安らかに眠っていただきましょうかねえ…！」

言った。瞬間、少年は狂気の笑みを浮かべて掌を向けてくる。

その手の先には先ほど自分の体を貫いた鉄の棒が切っ先を向けて浮いている。

そして、それは肉眼で捉えられるスピードを超えて心臓を貫こうと迫ってきた。

それは10メートルという二人の距離を刹那の間に埋めて迫りくる。だが、

それは八雲の心臓を貫くほんの数センチという所で壁に反射したボールのように元合った場所へと反射していった。

「ぐう…っ！」

それは放った側の少年の掌を貫いた。
狂気の笑みが一瞬にして苦痛の表情に変わる。

「元、暗部組織。『ケーブル』ねえ…」

八雲は立ち上がる。悠然とした動きにはさっきまでの焦りや苦痛は既に見て取れなかった。

「大方、統括理事会に牙を剥いた狂犬ってどこか…。まあそんなことはどうでもいい」

表情にも既に苦痛といった感情は出ていなかった。その名残を感じさせるのは額に浮かんだ脂汗だけで。

「お前が『こいつ』を狙うってんなら…俺は負けらんねえだろ？
てめえらの目的なんか知らねえし『こいつ』にどんな価値があるのかもわかんねえ…」

腹の辺りに血を滲ませた少年は掌に鉄の棒が刺さったままの少年を真っ直ぐに見据えて

「でも、一個。約束しちまったんだよ…。こんなくそつたれで不条理で馬鹿げた暗闇の中から…」

開いた瞳に感情という光を灯しながら

「『雫』を救い出してやるってな」

言った。

それが自分の出した結論だから。

だから彼はどんな傷を負っていたいようが動ける。

動ける！！

[illegible]

宙に浮いた少年は手に刺さった棒を引き抜いて再び目の前の敵に投擲する。

それが無意味だと学んでいるらしく反射によるダメージから逃れるため彼も高速で移動を始めた。

「考えたな三下。でもよ…そんな三歳児でも考えつくような対処法じゃ貫かれちまうぜ?」

能力によつて高速で移動していたにも関わらず、鉄の矢は心臓ではなく今度は頭を貫くために正確な軌道を描いていた。

だが、八雲は避けない。避けずに頭からそれに突っ込んでいく。

そしてまたもや体に触れるか触れないかの場所で軌道が変わった。

「なッ！」

それを予想していたはずの少年の声が聞こえた。信じられないものでも見たように口をあんぐりと開けている。

それも仕方ないことかもしれない。

真正面に反射されるはずの矢が全く違う軌道を描いて自分目がけて飛んでくるのなら。

「確かに俺の能力じゃ反射しかできねえ。でも、壁の角度を変えちまえば反射の方向を自由に変えられるんだよ」

「があああああああああつ！！」

八雲の言葉と同時に少年は絶叫する。

その少年の太腿は自分が放った鉄の矢に貫かれていた。絶叫しながらも忌々しそうな視線を彼は向けてくる。

それが仕方のないことだと彼は知らないから。

「どうした？ 雑魚にやられるのはそんなに屈辱だったか？ 安心しろ。聞きたいことが聞けたら楽にしてやる」

「ふざけてんじやねえぞおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

少年は再び咆哮する。

悔しそうに顔を歪めて睨み付ける。

でも八雲にはそんなことは関係ない。今目の前にいる人間を倒せさえすれば後ろにいる少女を守るのだから。

だから彼は目の前の敵に容赦しない。

空気を拒絶して足の裏に力を込めると宙に浮いている少年の元まで一気に飛び上がり少年の喉元を締め上げる。

怪我を負っていることなど感じさせない動きだった。

「…っ！？」

「さあ、お前が知っていることを全部…話してもらおうか」

喉元を締め付けたまま問いかける。

今までに負ったダメージからか少年は先ほどの八雲の様に冷や汗をかいていて、呼吸も何やら荒い。

それでも彼はプライドは捨てていなかったようだ。

ペツと唾を吐きかける。

もちろんそれすら八雲には届かず地面へと落ちて行った。

「いい度胸だ…。俺も暗部の人間だ。悪党の矜持位心得ている。その度胸に免じて…楽にしてやる」

「八雲っ…!!」

とどめを刺そうとして雫の叫び声が聞こえた。

一瞬何で叫んでいるか分からなかった。でも、自分の中の本能が何かを感じて動き出そうとしていた。それから遅れてほんのコンマ2秒。

先程と同じように体の中心が解けた金属でも流し込まれたようになって熱くなった。

「…っ、が…っ、あっ…!」

八雲の体には、正確には右肩の部分に黒い何かが突き刺さっていた。彼の能力の展開は自動式オートではない、完全に手動マニュアルなので認識していない攻撃、不意打ちには弱いという弱点を突かれた。それを敵が知っているかは分からないことだが…。

「うちの者が世話になったな」

八雲は後ろから聞こえる声に対して首を回した。そしてはつきりと見えた。

何の感情も込められていない残酷な瞳を持った男が自分を突き刺している。

だが、それ以上にその男の後ろに見えた光景に目を奪われた。

雫は何をされたのか。二人の女に腕を持たれて眠るようにその体から力が抜けていたのだから。

「て……めえ……！」

「すまないね。関係のない人間は巻き込まないという約束だったけど、まあ運が悪かったと思って諦めてくれ」

巻き込まない所か思いつき刺してんじゃねえか。

そう思うより早く彼は能力を発動させた。すると肩に突き刺さっていた黒い剣はブアッと液体のようなものになって行った。

突き刺された穴は栓を失い血が流れ始める。

それすら能力で止めた。

「…なかなか…手強い相手だったようだね…」

「はい……。ご助力いただきありがとうございます……」

新手としてやってきた男に八雲の手から解放された少年が申し訳なさそうに話していた。

でも、そんなことより。

[illegible]

八雲は吼えた。

自分の中に芽生えた怒りを持って。

彼は拘束された雫を救おうと接近する。

だが――

「ばあーか！」

雫の左手を掴んでいた少女から言葉が発せられた。

瞬間あと少しという所まで来ていた八雲の体が突如屋上の地面に叩き付けられた。

「がつ…あ…！」

頭に血が上っていたことと不意打ちによる能力使用でまたもや彼は攻撃をもろに受けて更には頭を強く打ちつけてしまった。
軽い脳震盪と共に演算能力が奪われる。

彼の倒れている周辺は紅蓮の血だまりを形成し始めた。

それでも彼は立ち上がる。

立ち上がろうとする

（こんなんで倒れてらんねえだろ！！　俺が…救うんじゃないのかよ！！）

グツと足に力を込めた。

が、すぐに世界が90度回転した。

「八雲っ！！！」

「あ……れ……？」

（立て……ねえ……？……何……で……？立て……よ……）

もう一度上体を起こす。

何時の間意識を取り戻したのか雫がこちらを見つめて今にも泣きだしそうな顔をしていた。

「まっ……てろ……今……助けてやる……から……」

彼は必死に頭の中で演算をする。

彼だって人間だボロボロで演算もろくにできない状況で立ち上がるのは不可能に近かった。

だから演算式を頭の中で組み立てようとするが、結果は能力使用不可。

もう、今の彼には為す術など残っていなかった。

「さて。イレギュラーの少年、これで終わりだ」

援軍に来た男はそう宣言すると八雲の所までゆっくりと空中を歩きながら近づいていく。

彼は八雲の元にたどり着くと地面に手を当てて、そこからコンクリートを変形させた槍を取り出した。

それを振りかぶる――

「待って！」

とその時――

拘束されていた雫が声を上げた。

男は彼女の方に目を向けた。

「目的は私なんですよ。だったらもう止めて！　もう…その人を傷つけないで…っ！」

彼女は泣いていた。

それが救われなかった現実に対する涙なのか。

目の前で彼が殺されそうになっている事実に対する涙なのか。あるいは両方なのか。

それは本人以外には分からない。

だが――

「私も殺生は好まない。おとなしくついて来てくれるなら了承するが？」

男は既におとなしく捕まっている事にそう言った。

それは彼女がこの状況から抜け出す術を持っているということらしいが、まだよく分からない。

「…最後に…その人と話を…させて…？」

少女の言葉にコクンと男は首を縦に振った。

これで少女がもう逃亡を図らないというのなら最善の一手だろうか。

拘束を解かれた彼女はゆっくりと八雲の前までやってきた。

「ごめんなさい…」

彼女は謝っていた。

その顔を八雲はジッと見ている。

いつ降り出したのか。

少女の表情は雨粒で濡れていた。

「私に関わったせいでこんなにボロボロになって……でも、もう大丈夫だよ？ 私は…充分…救われたから…。あなたのおかげで…楽しかったよ？ 楽しくて…嬉しかった…。だから！ ありがとう…」

雫は笑っていた。

八雲はその顔をかすむ視界で見えていても分かった。

仮面のような笑顔をただ貼り付けているだけだと――

救われた？ 誰がお前を救った？ 誰も救っていないじゃないか？
そう思っても体は動いてくれない。

頭もうまく回ってくれない。

助けを呼ぶこともできない。

それでも――

「私を救ってくれて……ありがとう」

最後の言葉が彼の心を締め付ける。

失ったら戻ってこないのに――

それでも

彼はもう何もできないと思ってしまった。

「さあ、私を連れて行って」

雫は立ち上がって男に向かってそう言い放った。
最初に八雲と出会った時のように感情の籠らない声で。

「良いだろう…。おい、拘束しろ」

「待……て……！」

八雲は手を伸ばす。

でも、もつ目の前の救われた少女に手は届かない。

もう、届かない――

ゆっくりと建物の中に消えていく姿をずっと何もできずに見ている
ことしかできなかった。

「くっ………そおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

最後の力を振り絞って叫んだ。
叫んでも何も返ってきやしない。

でも――

救えなかった自分が許せなかった。

掴めと思った手を掴めなかったことが

何よりも許せなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6690w/>

とある科学の拒絶反応（アウトラウンダー）

2011年11月20日20時06分発行